



# 都市農地と まちづくり



窓

・市街地の中の農地の行方

## 講演会開催報告

・農の時代

— 農を生かしたまちづくり —

講演② 東京農業大学長 進士五十八

2005年新春号  
(第42号)

発行：財都市農地活用支援センター



## 市街地の中の農地の行方

芝浦工業大学 環境システム工学科 教授 水口 俊典



### 1. 市街化区域内農地問題の経緯

市街化区域内農地の問題は、1968年に都市計画法による線引き制度が創設されて以来の、古くて新しい懸案の一つである。線引き制度設計の当初案にあった市街化区域内農地への「宅地並み課税」が骨抜きになり、当初の線引きにおいて適大な農地が市街化区域に編入された。1980年代には、農地の共存をも市街化の形態の一つとしてとらえ、その共存の状態を望ましいものに段階的に誘導してゆく方策について、都市計画審議会その他から提案された。しかし、「計画的に市街化を図る」という市街化区域の理念が硬直的に理解されたために、これは実現しなかった。

1980年代後半に大都市中心部から発した地価高騰とともに、いつでも宅地化できる土地でありながら、宅地としての土地保有税を免れている農地に対する都市住民の不満等を背景にして、1991年に宅地並み課税が実施された。この課税を免れるためには「生産緑地」に指定されて30年間の営農を義務付けられた。但し、この宅地化農地と生産緑地への2分は、大都市圏の特定市のみに限られており、その他の市街地との間で二重基準の状態が現在も続いている。両者の間の落差は、特定市とその近くの町村との合併を進めるに当たって障害の一つにもなっている。

1991年というのは皮肉なことに、バブル経済が崩壊して、宅地需要が大きく減退し、地価下落が始まった年でもあった。

### 2. 宅地化促進から多様なオープンスペースとしての保全活用へ

大都市圏の特定市街化区域内の宅地化農地は、宅地化促進のための課税に追われて、現在では10年前の半分近くに減少してきた。この間、生産緑地は15,000ha強で推移してきた。1993年当初の生産緑地の指定率31%は、近く5割を上回ることになるだろう。この生産緑地についても、営農者の高齢化に伴って今後急速に減少に向かうと予測されるが、従来の生産緑地の買取りは、一部の先進都市の事例を除いて財源不足のため殆ど進んでいない。

1990年代初頭以後の大きな社会的変化に伴って、市街地の中の農地の役割については新しい課題に直面している。都市住民の意識においても、農地をできる限り残すべきだという考えが増大した。

例えば市民農園については、農家と都市住民の双方の高齢化の進行（とくに戦後生まれの「団地の世代」の高齢化と退職）、土や生物との身近な接触機会への要求の増大などと共に、その必要性が高まっている。また、スプロールが進行した市街地では都市公園が不足しており、これを補うオープンスペースは農地の他に残っていない。従来の公園整備の多くは、農地が多く残る地区での土地区画整理事業によって実現してきた。区画整理事業の新規追加に多くを期待しえない現在では、公園あるいはそれに代わるオープンスペースとして、地区の特性に対応した農地の保全活用を図る必要がある。さらに、阪神大震災の経験から、震災時に農地が果たす延焼防止や避難、資材置場、仮設住宅等の用地としての役割が見直されている。

農地の宅地化促進から、多様なオープンスペースとしての保全活用に向けて、政策の重点を転換することが求められているのではなかろうか。その手段の一つとして、次のようなシステムの検討が望まれている。

- ①空地保全型の地区計画制度を創設して、市街地の中の農地（生産緑地、宅地化農地を問わない）、樹林地、空き地等を地区施設緑地に指定し、市民農園、都市林、ビオトープ等として整備すること。
- ②農住組合のような農家の協同組合を事業主体として認定して、必要に応じて保全する農地に対応する容積率を他へ移転し、都市住宅建設とセットにして組み合わせること。

## 講演 2

## 農の時代

～農を生かしたまちづくり～

東京農業大学長・農学博士 進士 五十八

岸ユキさんは、およそ土と無縁な世界におられたのに、やっぱり土に戻っていくわけですね。私は今お話を伺っていて、結局、この「農のあるまちづくり」といいますか、目指すべきゴールのイメージは、それだと思いませんか。つまり、第二、第三の岸さんをどうやってつくるか。そういう人たちが生まれるための環境づくりだと思います。それは従来の都市づくりではない、いってみれば第三の住環境のあり方を議論するということだろうと思います。

これまで、実際には少し緑の多い住宅地開発か、あるいはもっと高層化したような、今の都市再生でやっているような、住宅開発がだいたい多いわけですね。そうじゃなくて、もう少し農体験のようなものを取り込んで、付加価値の高い住宅開発が求められる。こう思うんですね。ですから、宅地化農地の単なる転用ではない、おそらく農地的な資源、土地資源がある場所を上手に、そのポテンシャルを活かして、新しい住環境へのニーズをとらえた、いわばもう一つのまちづくりを考えるとということだろうと思います。

## 「農はワンダーランド」が住宅のニーズに

これから住宅を利用するという市民は、農体験のない人ですね。いわば岸さんと同じタイプの人なんです。新しい民族というか。ちょっと違うんですね。私なんかは、子どものころ疎開もして、農村体験があるんですが、そういうのがない若い方にとっては、先ほど来、ずっと岸さんのお話を伺っていて、非常に心から感動しているんですね。私のように農村体験が少しあると、いや、あんなことで喜んでくれるなら楽なものだと思いがちで、何っていたぐらいいわね。つまり、新ゼネレーションにとっては、農というのはワンダーランドなんです。私の親とか上の世代は、農というのは厳しい、つらいものだった。いってみれば暗黒の世界を描いていたわけ。そういうものをおざわざ描いて、都市に大勢の労働力を集めたともいえるんですね。

しかし、今はもうそれが変わって、農にワンダーランド、すばらしい土地だということを感じる世代が、これから、いわば主人公になる。ですから、そこを皆さんは予測していただいて、そういう土地利用、あるいは、そういう新しいまちづくりをしていただかなきゃいけない。こういうこ

## くり～農ある

活用支援センター  
中、社団法人 東京都



とだろうと思います。

私がきょうお話しするのは、皆さんの仕事のユーザーですね。ユーザーの観点をこれからちょっとご説明したいと思います。

最初に論点を整理しておきます。農村というものの良さを発見できるのは、実は都市の時代だからだ、ということです。ヨーロッパでは、田園は神がつくり、都市は人間がつくった、という言い方もあり、人間が住むところは都市でしかないというのが、むしろ定説なんです。だけど、実際にはそれが破綻をして、ガーデンシティをハワードが考え、農大の初代学長の横井時敬という人は、新渡戸稲造と同級生で、日本第一号の農学博士なんです。読売新聞で『小説模範町村』という本を書いて、「都市が基本じゃない」という主張をしています。農村がもともと人間が暮らす場所なんだ、と。ただ、若干、文明性に欠ける、あるいは文化性に欠ける部分もある、と。だから、それをオンしなければいけない、と。いってみれば、便利さを農村にオンすれば理想的なまちになる。

ヨーロッパのガーデンシティというのは逆なんです。都市はだめなんだけど、やっぱり都市が人間をつくると思っているものだから、少し田園性が欠けるので、緑をオンすればいい。こういう発想なので、ちょうど逆なんです。

## 環境保全対策からも「農の時代」へ

私が申し上げたいのは、この後半の、横井時歌が主張したようなものの見方も、もうそろそろ21世紀は必要だよ、と。単に緑の多いまちなんでいうレベルじゃだめだ、と。ずっと岸さんがいわれていたようなあの喜びを皆さんに分かち与えるような、環境づくりがこれから求められるのであろう、ということです。結論は地球環境問題なんです。簡単にいうと、地球の人口は、100年間に4倍に増え、エネルギーの消費は25倍というわけで、この4と25の差が問題なんです。これが大変なエネルギーを、大量に、つまり無駄遣いを徹底してやるという社会をつくって、地球の環境問題を起こした。つまり、生存基盤まで危うくしたというわけです。

そういう原因をつくったのが、工学部です。それを告発したのが理学部。酸性雨はどこが問題だ、とかね。だけど、これを解決するのは農学部だという、これが私のテーマなんです(笑)。簡単にいうと、自然のことをよく知っていて、そして居住環境への要求のような、都市的ニーズにも応えなきゃいけない。つまり、応用もできなきゃいけないですね。理学部は基礎しかやらない。ここが問題なんです。私は、そういう視点で「農の時代」というようなことを言い出しているわけです。

## 過密・管理社会が生む「都市の病理」

都市病理の問題もちょっと指摘しておきます。都市化がなぜ問題か。デズモンド・モリスがいちばん衝撃的なことをいってございまして、彼は動物学者ですが、都市は犯罪とか殺人が多い、と。もう一つは異常性愛、いわゆるホモとかレズ。そういうのが多い。これは、動物園の檻の中の動物と同じことで、野生の動物にはないんです(笑)。

なぜ、檻の中ではホモやレズが増えるか。これは寂しいから愛したいわけだけども、異性と愛すると、子どもができてしまいますから、檻の中の自分の持ち分の空間が減るわけですね。過密になるわけ。食べ物が減る。食いが減るわけ。だから、檻の中では絶対異性と愛し合わない。つまり、動物というのはそういうもので、自分でコントロールしている。それで少子化になるわけですよ。過密な大都市は、18歳人口は去年から比べて3.5%ぐらいの減です。毎年ですよ。これはほんとに困るんです。大学のために子どもをどんどん生んでくれといっているわけじゃない。日本社会全体が、今おかしくなりつつありますね。

横浜市の都市計画をやっている、長期予測をやると、ほとんど日本人はいなくなってしまうので、外国人でできているようなまちなりそうなんです。それは、都市の過密という問題なんです。動物

屋さんはそういうわけです。私はほんとに深刻な問題だと思っています。

殺人というのは檻の中でいえば、相手を殺すと自分の居場所が増えるわけね。今3畳間だったら、これが6畳になるわけです。食べ物も増える、というふうに動物たちも感じるわけです。だから、ホモとかレズは単なる趣味の問題と想像するかもしれないけど、いわゆる都市文明という過密社会をつくってしまった文明のあり方への、ある種の生物学からの警鐘だといっていると思いますね。

今、環境の問題を申し上げましたが、もう一つ、人間自身の問題があると思っています。あるアメリカの教育学者は、人生の目標は何かというところと三つある。一つは、自らの熟成である。岸さんも、自らを熟成させて、見事な熟女に成長された。いわば自分自身が満足して、おれはおれの生き方をやっとなという、達成感みたいなものですね。二つ目は、そういう人間が愛のある他との関係を結ぶ。つまり、仲間とか連帯とかよくいいますが、社会参加もそうです。そして、最後、社会貢献。それによって誰かのためになる。人に尽くせる立場になったというところは、べつに相手のためじゃない。実は自分のためなんです。自己実現になるわけです。

もう一つ、アブラハム・マズローという人は欲求段階説というのをいってございまして、最後は「美に生きる」と。まあ、ひもじければお腹いっぱいになりた。寒ければ暖かくなりたい。これは生理的欲求ですね。しかし、孤立しているといやだから、仲間が欲しい。これは社会的欲求であります。最後は美を追求する。真・善・美なんて昔から哲学者がいつてきたのは、普遍性を持っているわけです。

こういう人間生活をどうやって保証するか。これが、衣食住の環境のあり方によるわけですね。ですから、住宅産業は関係ないんだと思ったら大間違い。つまり環境をデザインするという場合には、どういう生き方を保証してあげるかということを考えなきゃいけない。こういうわけあります。

## 個人・地域ごとに「らしさ」を追求

もう一つは、昔から、百姓(ヒヤクショウ)、まあヒヤクセイというのが正しいですが、古来、農民のことを百姓といいました。百姓はたくさん、姓はかばね。かばねというのは、昔は苗字のことです。苗字というのは、私は職業だと思っています。職業というのは、それに比較的秀でていられる能力なんです。これは私の定義で辞書にはそう書いてありません。ヒヤクセイというのはいろんな職業の人、大ぜいある、いっぱいあるということを書いてあるわけですね。私はそういうふうを考えて、たくさんの方の能力がないとできない仕事、たくさん

の能力を発揮できる仕事、これを百姓というんだ、と。

現代人は、せいぜい10姓ぐらい。あなた、何をやれますか。パソコンがやれますとか、いろいろいんです。役所の方は法律を覚えていますとか、財政の方は計算ができますとかいう。だけど、ほとんど肉体労働はしていませんから、肉体系の運動はゼロになりますからね。このバランスがほんとは大事だと思います。知性も感性も体力も必要なんです。残念ながら今の社会は分業化で、それができないようになってまして、だから、肉体がうずうずして、夕方から無駄に、何もものを選ばないで皇居のまわりを走っているわけです。これは、身体を何とかバランスして使おうとしていくわけですね。残念ながら管理社会というのはそういうところがあるわけ。

これを何とかバランスを取るためには、職場以外のところ、つまり、給料をくれる場所以外のところで、発揮できない部分を発揮するしかないんですね。今の社会は自前でアフターファイブのライフデザインをしなとだめ。どういう生き方をするか、あるいは5時以降どういう暮らしをするか。そして、自分自身のバランスを取らないと、残念ながら不完全な人生になってしまう。

私は今、東京農業大学の学長はしておりますが、専門は農業じゃありません。都市サイドの仕事をずっと、公園とか造園、ランドスケープ、景観をやってきました。この本も「農の時代」と書いてありますが、実は「スローなまちづくり」、「農を生かしたまちづくり」の本なんです。20世紀は都市の時代、21世紀は農の時代だといいたいわけです。ドローは「通貨より重大なのは農業です。農業は文化ですから」と、いっているんですね。EUの昔の委員長です。彼は、経済よりも農業が大事だといっている。それは農業を経済として見るといい見方じゃない、ということも一緒に考えてください。農業は文化、英語では「アグリカルチャー」。カルチャーというのは、その土地ごとに特徴があるわけですね。文化、もともとカルチャー、耕すという言葉ですから、耕すというのは、土地が違えば違う耕し方をするわけです。それは農業をやるとわかりますね。ラッキョウは鳥取のような砂っぽい土だったらいいんですが、粘土っぽい土はなかなか困りますね。ですから世界中で違うんです。

文化というのは、「らしさ」なんです。私は私、わが国はわが国、山梨は山梨、福岡は福岡というわけです。このアイデンティティ、国でも地方でも町でもいいんですが、「これが私」という、そういう感覚が大事だということですね。

## 「農が基本」は世界共通の認識

今、社会はグローバリズムがどんどん進みまし

て、「私は私」じゃなくなってきつつあるんですね。そういう中でこそ、「個」という、自分というのを自覚できる環境が欲しいんですね。だから、インテリアとかペラランダーゲニングとか、自分の人生の軌跡を一生懸命刻みつけようとしているわけです。役所でもそうですね。オフィスのデスクは、ほんとは公共のもので、誰がいつ座ってもいい。だけど、一方で個室をつくっている。自分の匂をつける。これは「落ち着いて暮らす」ということの基本なんです。そういう意味でアイデンティティというものを与える。その根本は「農」なんです。オクトーバーフェスタというビール祭り、ミュンヘンが有名ですが、これはまさに農の祭りです。

昔は、農村社会が政治の基本になっていたの、自民党政府ももっぱら農村票を意識していたけれど、最近どんどん転換するものだから、国会議員も危なくなってきました。小泉さんだって都市の人間ですからね、基本的に「農」より「脱農」ですね。やっぱり脱農化していますね、日本の政治は。

ただ、私は学長になる前に約5年、農産部長と別の学部長をやりました。農産部長のときには、全部で19学科ある大きい学部だったものだから、東南アジアとか南米とか、そういう農村地帯に行く会合が多くなりました。それでわかったのは、工業とか商業ばかりが威張っているというのは日本とかアメリカだけだ、と。わかりますか。いわゆる文化人と経済人でも、農業のことをしゃべるんですよ。私のほうが恥かしいちゃった。日本の農業のあれはどうなっている？ 指標をいわされるわけですね。GDPに占める割合みたいな話をもっと細かなるわけ。そういう農産なんですよ……”というしかない(笑)。つまり、世界の共通は、「農」が基本なんです。だから、EUなんかの政策には、やっぱり農を基本にした政策がたくさん組まれていきます。やっぱりアメリカが悪いんですね、私にいわせると。ああいう超高層をつくって、ストレスの線・垂直線を追求しているという。あれは歴史の浅さがなせる技だと私は思っているんです。ほんとうに文明は進んでいるんだけど、文化がどうも十分でないですね。

ところが、わが国は2000年の歴史を持っているわけですね。飛鳥時代から、ずっと營々と安らぎの線・水平線を基本に考えてきた。それが戦後、アメリカナイズしすぎて、もっぱらあの価値観にどっぷり漬かりすぎてしまった。そろそろ反省の時期で、私は本来の日本の文化というのに関心を持つようになってきたんだと思います。

ただ問題は食糧産業が国内総生産の1割しかないことなんです。これは、トヨタ自動車の年商16兆と比べて。農業生産額9兆円というは、石油製品の出荷額とだいたい同じになります。

お金に計算をすると、農の価値はちっとも高くないということになってしまふんですね。多面的機能なんていったって、トヨタ1社とたいして違わないですね、日本の田んぼや畑の環境価値は。ここが問題なんです。つまり、金に計算できるところだけで勝負すると、負けてしまうということです。だから、前半の岸ユキさんの話が非常に意味を持ってくるわけですね。その心が大事なんです。国民の心の健全性をやるということですね。これは、やっぱり農に期待するしかないというわけでありませう。

それで、その農の良さ。私はヒャクセイと申し上げましたが、全体でものを見る見方というものの幾つかを、皆さんにご理解いただこうと思ふんです。

## 全体を見ている昭和天皇の標本

### 昭和天皇の標本箱 浜名湖花博

EXPO史における生き物博の意義  
木本も草本も動物も植物も



マユミとタデ

オミナエシ

2004年9月いっばいで終わりましたが、浜名湖で花の博覧会をやっていて、そこに昭和天皇の記念館ができ、そこに展示されたもの。これは標本箱です。オミナエシとキモンシロチョウを留めている。こっちはタデとマユミです。普通、標本というのは、植物、つまり葉っぱなら葉っぱしか集めないものです。昆虫と一緒に留めちゃうんです。邪道なんです。それから木本と草本、草と木を1枚に留めるといふのも、普通はやらないんです。昭和天皇はそれをやっておられる。私にいわせると、こっちは邪道じゃなくて正道だ、と。つまり、学者は、草だけをやっている人は草だけ、コガネムシをやっている人はコガネムシだけ並べている。あれはマニアックなんです。自然というものはそうじゃない。タデの上にマユミというものは、湿地帯の植生なんです。だから、全体を見ている。オミナエシの草があれば、そこにチョウチョがやってくる。昭和天皇はそれをワッセットで、ちゃんと標本にしておられる。

われわれ学者とか研究者は専門だけの一姓、二

姓で勝負している。しかし昭和天皇はちゃんと百姓の見方でみておられる。

全体の見方、これは、私はランドスケープアーキテクチャー、造園が専門ですから。トータルランドスケープの見方をお話しておきたい。景観法がこの6月にできました。景観の見方がなぜ大事か。なぜ、今、景観法かということです。それは、大きくいうと、今の「農」を、都市とか工とかかだけではなくて、農も考えなくてはいけないという伏線でもあります。風景とか景観のことを英語でランドスケープといいます。ランド、土地や自然です。スケープというのは端から端までという意味なんで全体、総合ということです。いってみれば、土地や自然というものを考える、大事にするということ。

スケープ、端から端まで全部でものを見るということ、その両方が基本ということ。これが、私たち造園家のもの見方でありませう。ランドスケープといひます。これをつくるので、ランドスケープ・アーキテクチャーといひますが、造園学といひものの英語なんです。アーキテクチャーは建築ですが、そのまわりの自然と建物と全体の調和をやるというの、実は私たちの仕事なんです。ですから、狭い空間は庭園になるし、中くらいだと公園になるし、大きいのは国立公園になるというわけですね。

これまで分業・分業化した社会、効率だけを追求したけれども、環境問題を起こしてしまつた。たとえばBSEがそうですね。いわゆる人食い人種といひものがあります。それは全部、悪い意味で食べたんじゃない。すばらしい、勇ましい兵士がいた。それを尊敬しておれもあんな強い兵士になりたいという人は、勇者のお骨を食べちゃつたんです。亡くなったときにね。でも、結局、共食いですから絶滅するんですね。

いってみれば、BSEはそういひことですよ。「私、つくる人」、「私、食べる人」と分かれちゃつたんです。だから、牛が牛骨粉を食べさせられた。そういう共食いを防ぐという発想がなくなつてしまつた。これが、分業化社会の怖いところなんですよ。

## 風景を組み込んだ住宅・まちづくり

もうひとつ、風景の見方では「近く」、「遠く」が両方重なつてみえることが大切ですよ。たとえば広重の絵を見ると、近くに日本橋があつて、越後屋が中景にあつて、遠くに筑波山が描かれていふふうには、近景、中景、遠景がいつでもワンセットなんですよ。今の都市計画は、土地利用は敷地単位で考えていますからね、ロットごとにしかものを見えてない。皆さんが農住都市をつくるというのなら、まわりの雑木林とか農地とか、その向こうに見える富士山まで、あるいは奥多摩の山々

までを視野に入れてやるべきなんです。その景観までを入れないというのが、その土地の価値の出し方の下手な証拠なんです。

ですから、風景の見方が大事だと。これは、小島島水という人が「日本山水論」でいっているんですが、山というのは人と自然に分かれて、社会と個人、向こうは無機、有機という。ずーっと、工業、商業、農業、宗教、ずっといろいろありますが、つまり、それはまた歴史と科学で、その合計は芸術だといっている。山というのは山学ですね。山の科学は万有科学である、と。山を分析すると山と、それはすべての科学に通じる。それを総合化すると、詩であるといふんですね。それは芸術だと。この見方、私は大変すばらしいと思いました。つまり、日本山水論、志賀重昂の「日本風景論」の次に出た、日本で2番目の風景論であります。この中で、山は総合的なものだと。山へ行くと、拝みたくなるような宗教心もある。そこには、いろんな植物、絶滅危惧種もあって、環境問題でもあるわけですね。山はすべてのものなんです。だけど、これは山だけではないんです。ほんとうは居住地だってそうでなきゃいけないんですね。つまり、今の都市はただ交通の利便性だけだったり、あるいは、建物の床面積が何坪あるかとか、そういうのだけで考えているわけです。

風景を解剖すると、地質、地形と重なって風景はできています。これは解剖して見せると、という意味ですが、「風景」という言い方は非常に学術的なものから、行政は嫌いなんです。科学者も嫌い。論文にしにくいですから。こういう漠然としたものは。しかし、そういうもののは価値が高いということも、少なくとも頭に入れておいていただきたいと思えます。

私が言いたいのは、地形でいうと、何とか台という言葉がよくありますね。学園台とか、希望ヶ丘とかね。これは住宅適地になっています。牛久沼で、何とか台とつけているインチキがあります。やっぱり沼ですから。台というのは、高いところで、乾燥していて、眺望がいい。住宅適地なんです。農業的土地利用のときは、沼は水があるから歓迎でした。台地は、昔は茅刈り場であらなかったんで農業には不適地でした。しかし、住宅には適地ですね。

文明というのは恐ろしいものです。成城の街に住んでいる人たちは、みんな高級住宅地に住んでいて、立派だと思っているでしょう。あんなのは、喜多見の農家からいうと、4、5軒で持っていたもうどうしようもない生産性の低い土地だったんです。

風景というのは、その土地の植生、北海道にエゾマツ、トドマツがあり、沖縄にソテツがあり、デイゴがあり、九州にクスノキが、そして関東はシラカシというように、違うんですね。それが価値なんです。ところが、住宅開発をやると、

全部アメリカハナミズキを植えるわけ。皆さん、ウケるんじゃないかと思っているんですね。ウケるのは一瞬だけです。つまり、ここが大事なところなんです。ランドスケープ、土地というものに注目するというのはそんなんですね。今は個性を求めているわけ。私の家、私のまちというの求めているわけですよ。だから、わがまちらしさがないようなまちは、平凡なまちなんでですよ。三流のまちなんで。

ところが、一生懸命、東京じゅうのビルの外構は全部サツキにしちゃった。それで、ちょっとおしゃれなまちという、すぐハナミズキ。玉川高島屋の前の通りはそうなんですよ。なんでアメリカから花まで入れなきゃいけないの。ヤマボウシというのがあるんだよ、日本はね。同じようなものですよ。

「農」の多面性は、これまで、どちらかという国の政策は産業としての農業。もっといって、農家の所得を上げるといって考えてきた。ところが、これが大変なことなんです。いくら大規模化しても、肥料や農業をいっばい田に投入しても、工業と農業、もともと違うんです。生産性が。いくら技術革新をやったって、3倍の生産性を上げる、再来年5倍にするなんてできないんですよ。機械でつくるものは、あるいは特に化学的なものですね、これはいくらでも増やしていけるんです。夜中だって機械を動かせばいいんだから。

しかし、そういう生産性の低い農業が、この国土の中に、この地球の中に残っていなければ、国土の保全はできない。緑の地球は守れない。工業の原材料になる清らかな水、IT産業を支えるコンピュータチップを洗うきれいな水は、農業が健全でなければ出ないんですよ。だから、工業のいちばん大事な資源は全部、農業側から供給しているようなものなんです。私からいうと、デカップリングは当然です。工業側で生み出した富は、農業側にもわけて、それでバランス取るべきだと。農業環境を維持するというのは、もっと労働力が必要なんです。今のような日本の国土のバランスではむづかしい。国土の8割の地方には人口は2割しかない。8割の土地を2割で維持せよというんですから、無茶苦茶なんですよ。当然、都市から応援に行かなきゃいけないということになる。

家風という言葉がありますが、つまり、一軒一軒の家には、家のスタイルがある。これを家風といったんですね。農家という「家」が健全であるということが前提なんです。つまり、家庭教育がしっかりしているということが前提なんです。今、これが崩れつつあるわけですね。コミュニティシステムとしての農村、つまり「農」のトータルな価値は、農業という産業だけではなく、農地、農民、農家、農村、もっというところと農芸文化とか農民文学とか、いっぱいありますね。





それに加えて、ほんとは産業というのがあるだろう。

## 都市計画に農地を含む「混合論」

もう一つ、景観法は景観法単独じゃございませんで、緑三法という言い方で、都市全体をつなぐといえますかね。都市緑地法のような概念で、オープンスペースのネットワーク全体を考えよう、と。

つまり、大事なことは、都市というもののありようをどう考えるかということですね。これまでの戦後の都市計画の流れでいいますと、だいたい土地利用の純化ということと、都市のインフラの整備ということを両面でやってきたわけですね。ただ、その中で、土地利用の純化というと、農業地域を排除するということに実はなっていましたね。これが宅地並み課税という大きな動きでありました。農地はいらない、と。都市というのは、農地なしがほんとうだところ考えた。これは、旧来の、近世までのヨーロッパの思想なんで

### 都市の中の緑地と農地 都市のグリーンミニマム (達士 1975年) 農地を含めた自然面50%



ですね。城壁の中は、もう緑なんて一つもない。もう石畳だけという、ああいうまちをつくったわけです。フィレンツェなんかもう典型的なものです。まったく石の空間をつくった。その代わり、外は完全に田園にするという、二分法だった。

しかし、日本の都市史は、すべてのコミュニティが緑を含んでいた。特にプライベートガーデン、庭園というものを持って発達していた。日本のまちのあり方というのは、特に江戸の山の手の武家住宅はそうですが、全部庭付き一戸建て住宅というのが基本形です。

プライベートガーデンを全戸が内包していて、パブリックガーデンの必要があまりなかった。防災のための火除地ぐらいですね。いまだに永田町

や国会のまわりにだって、戸建て住宅で、緑の庭を抱え込んだところがありますね。日本の一つのスタイルだった。そういう日本の都市の伝統というものをまったく無視して、もっぱらヨーロッパ型都市計画の教科書を学んでしまったわけですね。どうもそれがまずかったということですね。

私も学会長をやっておりますが、都市計画の流れでは、もうすでに十数年前から、都市計画の論議の中で、「混合論」という言い方が出ておまして、都市の中にも農地とか、いわゆる都市的でないものも混合しておくべきだ、と。ただ、混合というのは、何となくでたために混ざっているということで、気にくわないんです。ほんとは「融合」とか「化合」じゃなきゃいけないんですね。これが、ほんとうのゴールのイメージだと私は思います。

これはミュンヘン市ですが、農地を含めた緑地地域が1/3以上を占めます。さらにその他に農地も別途あります。しかも、この緑地の中には、ク

ラインガルテン、集団的な市民農園区があります。だいたい集合住宅に住んでいる、いわゆるアパートに住んでいるような人の3割から4割近い人々は何らかの形で市民農園とふれあっている。まあ、都市によって違いますけどね。そのくらいの方が市民農園を借りて持っているわけ。しかも、このロットの大きさは、だいたい100坪から200坪くらいある。ドイツは雑草がやたら伸びないから、うんと楽なんです(笑)。芝生の面積も認めているし、いわゆる庭園みたいになっているんです。ゾンマーハウスと一緒に花畑と野菜畑、それから果樹をまわりにやっています。それで、ちょっとした納屋を入れている。市民農園でそれなんです。そういうのが100区画も200区画もダートと並んだのが、こういう中に計画されて入っているわけですね。

ですから、いかに都市住宅、都市に住む生活といえども、つまり、アーバンライフといえども、農地付きというか、農地との関わりを持ちながらのライフスタイル化ということですね。もつという、それがなければ、何百年の間、都市生活で生命の再生産はあり得ません。江戸っ子が3代続かないというのはそういうことです。江戸じや、子どもの再生産ができないということですね。江戸が活性化しつづけてきたのは、流入人口のおかげです。この東京の活力は流入人口で維持されているんであって、江戸っ子だけだったら、もう潰れていきます。つまり、元氣な子どもが継々と次に続くというのは、やっぱりそういう自然との

つきあいの中で、それがあたりまえのライフスタイルがなければだめなんです。そういうことを戦後の東京はすっかり忘れていたんです。

## 戦前はすべて菜園付き住宅開発

先ほど、岸さんは芦屋に生まれられたという話を聞きました。芦屋とかあのへん、阪神間の住宅地の戦前の開発ですね。われわれ造園家の先輩たちが大きく関わっています。たとえば花苑都市、そういうのをつくっている。全部、菜園つき住宅です。戦前の住宅開発は全部菜園つき住宅です。

私が今、引越して住んでいるのは南林間というところですが、林間都市は昭和10年代に開発した。小田急の初代の社長の利光さんがやった。「林間都市100万坪計画」というんですね。中央林間、南林間、東林間と三つあるんですが、これは全部、ロットが300坪です。大きなゴルフ場をつくらうとしたり、あるいは果樹園をちゃんと都市計画の中に位置づけているんですよ。ですから、戦後の住宅開発だけが世知辛いものをやっているんです。つまり、戦後、住宅不足で、やむを得なかったんですけどね、経済的に。だから、まわりの庭というものもすっかり忘れた。家庭というのは家と庭。私、みんなに、現代の東京はホームレスだと思っている、と。

古代ローマの住宅です。実はここが入口で、アトリウム、ペレストリウムという中庭があるんですが、その奥にクシュストス、菜園がついていました。ですから、古代から、都市住宅といえども、全部、菜園つきなんです。

ですから、私が皆さんに提案しているのは、本来のあり方に行くということなんであって、特別のことを申し上げているわけじゃない。なぜか。これは多様性というものが大事だということをいっているんです。いわゆる土地利用の多様性。森もあれば、畑もあれば、もちろん家もあっていいし、商店街もあっていいし、工場地帯もあっていいんです。土地利用を純化して単純にするというのは、景観的には美しい。都市景観的にはね。しかし、住宅、住まい、そこでさっきの生命の再生産をやる、そういう場所としては、甚だ不適地なんです。新宿の都庁のまわりのああいうところよりは、西口の、あるいは歌舞伎町のほうがずっと心地好いという、これと同じことです。

## 六本木ヒルズに「田んぼ」を提案、森さん実現

そういう意味で、私は、都市といえども、多様な農との関わりを持つべきだという提案をしているわけです。六本木ヒルズでは、私が森社長に提案して田んぼを作ったんです。庭園があり、その一面に田んぼがある。屋上緑化の相談を受けたとき、メキシコ万年草などを植えたものじゃし

やがない。多肉植物を植えたって、ヒートアイランド現象の緩和にはならないでしょう。だって、いったん水をつかまえたならもう放さないようなサボテンの仲間を植えたってね。水が蒸発する緑で都市を覆ったときに、ヒートアイランド現象の緩和になるんでしょう。

それで、水田をつくってはいかがですか、といったの。森さんのすごいところは、すぐ設計変更させてね。ここだけ田んぼをつくってくれた。米4俵取れます。今、農大の昆虫の先生たちがビオトープ性というか、どういう昆虫がどのくらい発生するかというのを、調べています。

西武ドームでは、ガーデニングショーというのを、今年7回目かな、やってみまして、私は最初から審査委員長をやったんですけど、こん

## 象徴農 六本木ヒルズの田んぼ 都市と「農」のバランス



なのが最近はある。農家を庭にしている。これ、戦後の日本だと、こんなのバラックとって怒ったわけですよ。今は逆ですよ。こういうのがウケるんです。いかに納屋っぽい。バラの花ばかり見ていると、ダイコンの花のほうがかわいいというような感覚ですね。

これは、世田谷区でクラインガルテンというのを、私が委員長でやったんです。これは、世田谷の宅地化農地というものがが増えてしょうがないので、どうやって農地の形で残そうかと。農家の財産としてやるのに反対する人はいるだろうが、農地の形が残ることに反対する都民はいないですね。それで、市民のための農地と、こういう考え方を普及したかった。最初は4、5か所つくろうという話だったけど、1か所で終わってしまいました。

従来は区民農園は、年間3,000円とか5,000円とかしか取ってないんですよ、1区画。これは毎月そのくらい取れ、と。できれば、乗馬クラブかテニスクラブと同じぐらい取ったらというのが私の持論でして、馬に乗って、いわゆるライディングをするのも一つのスポーツレクリエーション。だけど、畑をやったって、レクリエーションなん

ですからね。

その代わり、このクラブハウスにはシャワールームもつくったし、サロンもつくりました。それから庭のような空間でバーベキューもできるようにしましたし、お花畑もやれるというふうにしたんです。テニスクラブとか乗馬クラブと同じぐらいのクラブ性を持たせる、と。そうすると、岸さんもひょっとしたら、ここなら環境もいいからって、来てくれるかもしれない。従来の市民農園はあまりにも汚らしく、ダンボールの壊れたので囲ったり、ビニールのひもでやったりして、みみっちかったんですよ(笑)。きれいにしよう。こういうことでやりました。

## 都市農業を景観条例で担保したい

楽農クラブ、これは私の同級生が川崎でやっているんですが、こういうのが今、次々増えてきて、首都圏では大変な市民農園ブームになっています。それだけニーズが高くなっているということです。

都市全体の魅力、東京の魅力ということを考えると、私は農地が必要だ、と。それで、17年前からの「東京・農のフォトコンテスト」というのを始めたんですが、これは、加藤源蔵さんという人が、都の中央会の会長でして、私の提案をすぐ受け入れた。宅地並み課税という問題があったからなんですが、農を都会の人たちに理解させなきゃだめですよ、と。それで、まず写真のコンテストを始めた。米1俵を褒美にあげるということで、やっていた。10年終わって、それは本にしましたが、さらにその後は、場所を選定して場所を守ろうという企画ではじめてそう8年目を迎えました。だから、18年前からやっているんです。すばらしい農地を東京じゅうで守って、できれば景観条例でちゃんと担保する。

国際都市・東京とは何ぞや、ということですね。ロンドンにハイパークがあり、パリにブローニュの森がある。そういうのと同じように、東京には多摩にも、あるいは区部でも、周辺区にはまだまだ農地があって、そういうものは上手に生かせば財産なんです。それが、東京の魅力になるわけ。山の手と下町、あるいは川の手なんていう言葉も使いますね。東京は、根岸と根津のような震災にやられなかったまちもあるし、六本木のような超高層もある。しかし、多摩に行けば、蓮田もあれば、柿生、麻生、多摩川梨の梨畑もある。この多様性の魅力が大事だと思うのです。

## 学農 銀座のバケツ稲と学校農園



これはブルーベリー畑。八王子市です。あるいはブドウ畑。こういうのを指定してきました。江戸川区では楽農。農家がつくったものの朝市。江戸川だけじゃないですけど、あちこちでやっています。こういう農家自身の写真が出て、地元にも貢献しているというわけです。

それ以外に精農とか援農。これは、一生懸命やる農ということです。これは、毎日新聞が農業記録賞というのを30年間やってきたので、これはちょっと農大のPRなんですけど、農大賞というのを出して、高校生部門をつくりました。どういうことかという、科学賞というのは、読売科学賞というのがあって、少年向けがあるんですが、農業体験というのは、先ほどのお話のように、やっぱり子どものころからふれあうということが非常に大事なんです。ところが、今の学校は、だいたい土をさわるのが嫌いのようです。世田谷の喜多見小学校というのは、歴代の校長が「農業が大

## 精農／援農 「農」と生きる

### キラキラ農業

毎日農業記録賞 高校生部門創設／東京農業大学賞

### キラキラ農業

高校生部門



「農」や「土」から遠ざかることが文明か？  
現代人は、生き物育て、田舎暮らしを求める

事だ」ということをいって、労作教育という、労作の時間というのをつかってね、農業体験をさせているんですよ。そういう校長が増えるといいんですけど、ぜんぜんこれが増えないんですよ。

それで、高校生、これは農大に、いい農業体験の記録を発表して、作文を募集して、すごいのを最優秀と。400人ぐらい応募があったんですが、支局が選んできたのをもう一回中央で選んで10人、これはもう優先入学する。つまり、偏差値とかいわないで、すばらしいのは全部入れるというふうにしたんです。一人か二人2年生がいたから、ほとんどの7人ぐらい今年入ってきました。問題は、これを追跡調査して、体験がすばらしかった子は、本当に大きく成長するということを実証しないとイケないんですが、しかし、この体験の作文、『きらきら農業』という本があって、これに出ているんですけど、ほんとに感動的ですよ。やっぱり子どもはもっと敏感で、ほんとに感動的な文章を書きますね。頭で覚えた知識、インターネットで覚えた知識では感動的にしゃべれないけど、自分で体験したことはすごく感動的にしゃべれるものですよ。しゃべるといこうか、これは書くんですけどね。

それで、農住。景色、景観。

それから、循環とか環境の問題ももちろんありますね。

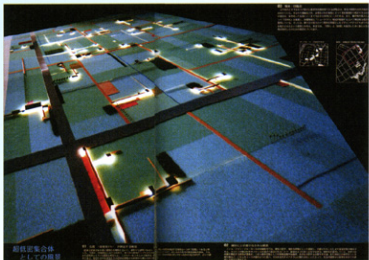
これは、わが家でもやっているので詳細にお話ししたいのですが時間がありません。

最後に、皆さんの参考にとお思って、急遽入れました。数年前、日本建築学会が、「新世紀の田園居住」というコンペティションをやりました。建築学会は毎年新しいテーマでコンペをやっているんですけど、数年前に、この田園居住というテーマでやったんですね。これは、私が審査委員長を引き受けました。これは本になって完っていますから、ごらんください。これは白川郷ですが、いわゆる青山臨水といえます。後ろに山があって、前に川や池、田んぼがあったりして、水平に広がるという、人間というのが最も落ち着く、そういうのをふるさどとしてやってきました。住んできたんですね。

後ろに必ず山。山がなければ、屋敷林をつくって、これを山と呼んだ。あるいは背戸の何とかという言い方をしたんです。こうした暮らしぶりを新しい時代に、建築系の学生たちはどう描くかというコンペをやったんですね。私はここで、半分おもしろかったけど、半分ガッカリしました。やっぱり工業大学とか建築学科とかいうのは、理屈ばかりでダメだなと思いましたね。ですか

ら、ここには最優秀作を紹介していません。こんなバカなことをやっちゃだめだと思っているものだから。審査委員長としてはね。やっぱり非常にメカニカルな発想なんですよ。カプセルハウスを田んぼの中に置いたらいいとかね。そういうんで、非常にメカニカル。

## 田園居住



これは比較的農地の良さというのを生かしている。印旛沼に場所を設定して、これ、水田地帯。そこにこういうデッキを入れて、一軒ずつ入れるという、実に超低密集集合体と書いてあるんですけどね、そういう計画です。

これはグレイブスケープ。これこそ山梨なんです。勝沼がベースでね。勝沼のブドウ畑ですね。ブドウ畑は、上も平らで地面も平らだから、二段の地面があるんだというわけ。その間に、こういう家を入れて、上から目線、露天風呂をつくって、ブドウ畑の広がる風景を味わおうという。あるいは、ブドウを食べているのもありますが。そういう地形の変化とブドウ畑がつくるこのやさしい、しかも、ブドウによって葉の色とか、ずいぶん変わっていきますし、そういうものの変化を味わおうという、これは非常に素直なプランですね。そういうアイデアもありました。

これはライフストーリー。これは、紀和町かな。高齢化した農村地帯の段々畑で、大学をつくって、福祉学科をつくって、そして、農地の管理と、「リハビリテーション学科」と書いてありますが、学校の経営と、農地経営と、福祉対策を込みにしてやろうという計画です。

## 無数の農ある生活・連携をつくろう

最後、結論ですね。本には何十作品と載ってい

ます。何百という応募がありましたから。結論は、単に農地を生かすとか、農地なら農地だけに注目するわけではない、ということですね。地域の産業全体とか、歴史とか文化とか、ライフスタイルとか、そういうものを総合する。私は、これは、まちづくりと名乗る限り、大事なことだと思います。単に農地があるから農地を生かす。農業的土地利用の観点だけでやってもいけないし、あるいは住宅開発だけでもないと思うんですね。やっぱり地域づくり、地域全体の歴史や文化や、新しいライフスタイルをつくって、これからの市民に、いってみれば参加型でやってもらう。

私、「環境市民とまちづくり」（ぎょうせい刊）という本を去年3冊出しました。「自然共生編」、「環境共生編」、「地域共生編」というんです。つまり、これから、多くの市民は、高学歴化の中で何かやりたい。さっきの自己実現とか、社会貢献ですね。テーマは環境にたいぶん関心があるんですね。それを発揮できる衣食住、ライフスタイルをいかに構築するか。そのために、どういう住環境を提供するか。その中でどういう住まいを提供するのか。こういうふうと考えていただくべきだろうと思っております。

市民、いわゆる都会の人たちと農民の関係でいえば、学校の子どもは、農を学ぶ学農、普通の市民、遊び人は、市民農園をやる。もうちょっと頑張る農を考えると、一人一人の国民にあるわけですね。農と都市住民との間に、こういう、こっち100、あっち100、この辺だと50、50というわけで、いろんなものがなきゃいけないだ、と。そういうチョイスが可能な、そういう国土づくりや都市づくりをやるべきだ、と。

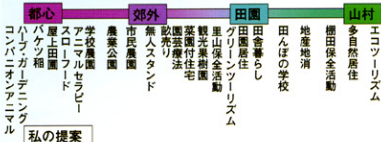
もっと具体的にいきますと、都心、郊外、田園、山村というふうにすれば、コンパニオンアニマル、ペットを飼う人もいい、ハーブをやる人も、ガーデニングも、バケツ稲も、屋上の田んぼも、スローフードも、アニマルセラピーも、学校農園も、と。このへんから、菜園つき住宅、観光果樹園、あるいは園芸療法、里山保全、グリーンツーリズム、田園居住、地産地消とか、ずっとエコツーリズムまで、ありとあらゆる場所で、つまり、全国どこへ行ってもいろんな可能性がある。それを、皆さんがどうやって計画し、プログラムしてあげるか。

私の提案、こういうことを皆さんでやってくる、と、さまざまな農との関係が結べる。全国

## 市民・農民の、「農」との多段階的関係



## 都市民の「農」とのふれあいメニューいろいろ



### 私の提案

さまざまな「農」との関係 (TAMAらいふ21 進士 1993年)

精農、楽農、援農、遊農、学農

全国民総第5種兼業農家化 (月刊JA 進士 2002年)

民、「総第5種兼業農家化」ということが実現する。これは変な言い方なんですが、今、第2種兼業までの分類しかないんですけども、つまり、ちょっとでも農が大切だと、農によって自分の自己実現を図りたいとか、社会貢献をやりたいとか、もっと豊かな老後を暮らしたいとか、いろんな人がいられる。そういう人はすでにもうそれで、農村に住まなくても、蒔峰に通わなくても、第5種兼業農家化なんだと、こういうたいわけですね。いってみれば、全国民ですから、都会人全部を兼業農家にすると、と。こういうのが私の最後の提案でございます。

## プロフィール

進士 五十八 (しんじ いそや)

1944年京都市生まれ。1969年東京農業大学造園学科卒業、87年東京農業大学教授、93年総合研究所長、95年農学部長、98年地域環境科学部部長、99年向学学長、現在に至る。これまでに(社)日本造園学会、(社)日本都市計画学会、東南アジア国際農学会、日本野外教育学会副会長、日本環境教育学会運営委員などを経て、現在、日本農学アカデミー理事、GCHERA理事、NPO法人日本園芸福祉普及協理理事、国土交通省社会資本整備審議会、内閣府中央防災会議専門委員、環境省ほかの自然再生専門家会議委員、東京都景観審議会副会長、川崎市環境保全審議会会長、新宿区景観審議会会長、世田谷区教育委員会など。国立公園協会田村賞、日本造園学会賞、golden fortune賞など受賞。著書は「アメンティ・デザインーほんとうの環境づくり」「風情デザインー感性とボランティアのまちづくり」「農」の時代ースローなまちづくり(いずれも学芸出版社)など。





市街化区域内にある農地を活用し、道路や住宅等の整備や保全をしていくために活用したい制度や事例などをご紹介します。

## Contents-目次

### お知らせ

### 農住組合制度

#### ●農住組合制度の紹介

- 農住組合によるまちづくり
- 制度の概要
- 設立要件
- 事業の概要
- 設立手順
- 優遇制度
- 対象市町村

#### ●農住組合の実績

- 数字で見る農住組合
- やっぴよ農住組合
- 設立実績

#### ●Q & A

- I 事業の進め方
- II 組合設立準備
- III 基盤整備事業
- IV 施設建設・管理

#### ●関係法令・通知集

### 交換分合

- はじめに
- 開発が困難となっている地区のまちづくり
- 交換分合事例

### 市街化区域内農地の動向

- 市街化区域内農地の動向
- 農地所有者の農地利用動向
- 自治体における農地活用の動向
- 市街化区域内農地における営農に対する都市住民の意識
- 都市農地の持つ多面的機能等実態調査
- 東京都の市街化区域内農地に関する基礎調査
- 神奈川県市街化区域内農地に関する基礎調査

### リンク集

<http://tochi.mlit.go.jp/tosinouti-katuyou/index.htm>

## What's New-新着情報

2004.11.19

- 「お知らせ」更新しました。 Up
- 農住まちづくり支援制度「画整備立ち上げ支援関連」
- 農住まちづくり支援制度「普及啓発活動支援関連」
- 農住組合功績者表彰(16年)
- 平成16年度
- 「都市農地を活用したまちづくり情報交換会」
- 人材育成研修支援制度
- 都市農地活用アドバイザー制度

2004.10.21

- 「やっぴよ農住組合」に3事例追加しました Up
- 桑名市蓮花寺農住組合
- 四條市市栗尾地区農住組合
- 神守市北別府第一農住組合
- 「お知らせ」に農住組合功績者表彰予定を追加しました Up
- 横浜市片倉農住組合
- 桑名市篠原東農住組合・桑名市篠原西農住組合
- 金沢市農業協同組合

2004.9.17

- 「やっぴよ農住組合」に2事例追加しました Up
- 東広島市下見菜地農住組合
- 久山町下山田原田農住組合

### 美しい景観づくりのための土地利用

### 定期借地権制度

- 定期借地権制度の紹介
- 事例
- 資料

#### 国土交通省 土地・水資源局土地情報課

- ・「都市農地を活用したまちづくり」に関するお問い合わせはこちらまで
- ・当ホームページをご利用になる上での注意点(リンク・著作権については)はこちらをご覧ください
- ・当ホームページに関する問い合わせ先  
財団法人 都市農地活用支援センター  
TEL 03-3225-4423  
FAX 03-3225-9423

# 都市農地を活用した 良好なまちづくりをお手伝いします。

## 業務内容

- 土地活用に関する相談
- 都市農地活用アドバイザーの派遣
- 調査研究
- 研修会・セミナー等の開催、支援
- 図書等の刊行



## 財団法人 都市農地活用支援センター

### 編集 後記

都市型社会、少子高齢社会が成熟して変革期を迎えているのか、都市づくり、まちづくりの重点も変わり、景観、農、緑を重視するようになってきました。それに合わせて、景観緑三法が昨年12月に施行されたほか、来年度予算では、三位一体改革などもあって、新しい施策や事業の仕組みも変わってきました。明治以来の長い中央集権国家の伝統が次第に地割れを起こし、地方分権の芽が地表に顔を出し始めているかのように思われます。住民に身近な市町村が、地域住民と協働してまちづくり条例を検討、制定する例も増えています。民間企業の活用も従来と違う参加型が進行しているといわれます。とはいえ、まだまだ少数のよう

です。自治体職員の不慣れや力不足を指摘、「優秀な人材を中央から地方へ」という声もあります。また、経済の低成長で、財政事情が厳しいという制約もあり、さらに市場原理の進行による競争が加速されている背景もあります。そんな中でも知恵をしまし、ソフト面での新機軸を打ち出すことが求められています。仮にこれを放棄したり後回しにすれば、観光客や交流人口は減少、「シャッター商店街」はそのまま、農地の耕作放棄は拡大、定住人口まで減少するという結果を招きかねません。この情報誌も土地をめぐる活性化対策のヒントになる情報提供に知恵を絞らなければ、と決意を新たにしています。(M, A)

当センターの出版物、パンフレット等に関するお問い合わせはTel.03-3225-4423にご連絡ください。

出版物を  
ご希望の方へ

なお、直近の情報はホームページ (<http://www.tosinouti.or.jp/books/index.htm>) に掲載しています。ホームページには以下の手順でアクセスが可能です。

- ①お手持ちの検索エンジンにて「都市農地」と入力し、当センターのホームページにアクセスください。
- ②画面左端のメニューバー **出版物** をクリックし、さらに以下のイラスト部分をクリックしてください。

### 出版物

- ◆ 出版物紹介
- ◆ 申込書

← クリックして下さい

都市農地とまちづくり

2005年 新春号  
(第42号)

- 発行所—(財)都市農地活用支援センター  
〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目25-6  
新宿加藤ビル5F  
TEL 03-3225-4423 FAX 03-3225-5423
- 発行日—平成17年1月24日

ホームページ・アドレス <http://www.tosinouti.or.jp>

- 発行人—福本 英三
- 編集責任者—藤田 征
- 事務局—三角 秀樹 荒井 貴  
藤原 史子